

二〇二三年 夏号

海禅寺新聞



Vol.38

『海禅寺新聞』第38号

少し前のこと。お隣、芙蓉園での出来事です。お昼寝後に、年長児さんの有志たちが、小さいお子さん達の昼寝布団を畳んで運び片付けてくれます。子どもの事ですから、運べる布団は1人で1つ。そうした折、その傍らで積み上がったたぐさんの布団を、私も手伝おうと何気なくエイヤつとまとめて5つ程持ち上げ、運ぼうとしました。

するとその様子をみていたあるお子さんが一言。「すごい！先生、大人みたいだね！」と…。

こういう子ども達の純朴な一言は時に深い示唆に富んでいます。そのお子さんにとって私は、「先生」ではあるけれども「大人」ではない認識であったということ。では大人ではないこのオジサン先生はいつたい何者なのだというツツコミはさておき、この言葉は私にとって褒め言葉に感じられました。それは子ども達が恐らく私という存在を、自分達の対局にいる大人ではなく、どことなく自分に近い大人みたいな人という思いを持っていたのではないかと感じたからです。日々できるだけ子ども達に近い存在でありたいと思っ



私には嬉しい表現に聞こえたのでした。

ここで今回じっくり考えてみたいのは、「大人」とはいつたい何なのか、「大人」になるとはどういう事なのかという点です。そしてそのことを通じ、私たちが大人になる過程で失ってしまった大切な何か、目をこらしてみたいのです。

「大人」とは辞書によると十分に成長した人を意味し、具体的には考え方や態度が相応に成熟し、かつ思慮分別がある存在を指します。母親の胎内で約10ヶ月過ごした後この世に生まれ出たとき、人は親をはじめ周囲の誰かの直接的な助けなくして生きていくことはできません。そしてその時々適切な援助を得て、少しずつ確実に成長発達していきます。

また周囲の大人達も、こうした援助をすることを通じて、人としてある種の成長をしていきます。他の動物は生まれてすぐ活動(行動)できるものが多いですが、人間はそうではない性質を持つことで、特有の親子時間を過ごしていきます。こうしたプロセスを通じて、子どもを中心に家族を作り、時間をかけて子育てをして、そこを基礎にしながら個として、そして社会的にも人類は進化してきました。

ところで親子の育ちとは互惠関係にあるものですが、ともすると大人は子どもをか弱い存在として軽視してしまいがちです。その根っこにあるのは、大人は人生の経験者であり、子どもは人生におけるほんの初心者でしかないという少々見下したような認識です。実はこの捉え方をすることによって私たちが失っているものがあります。アメリカに禅を広めた、鈴木俊隆老師の言葉に次のような一説があります。「初心者の心には可能性が溢れているが、熟達者の心にはそれが無い。」

iPhoneで有名なアップル社を創業した、かのスティーブ・ジョブズ氏も愛読していたという鈴木師の名著『禅マインド ビギナーズ・マインド』において、師は更に次のように続けます。

「初心は、それ自体で満ち足りているものを求める心が強くなりすぎると、心は満ち足りない状態に陥る。この状態になると、嘘をついてはいけけない、倫理的に反することをしてはいけけないなどといった、仏の教えに背いてしまう。」

もし、あなたが初心を持ち、心が満たされた状態ならば、このような教えは自然と守られる。

つねに初心を保つことは難しいものだが、これこそ禅において最も大切なポイントである。」

この禅の教えは、人生においても共通するのではないのでしょうか。それはつまり次のような提案です。「今までの常識や先入観を一度手放して、初心に戻って考えてみましょう。経験や常識にとらわれなければ、今までに見えなかった見方や発想をすることができ、自由で可能性のある世界を思い起こしましょう。」

こうした眼差しで幼児の姿を改めて眺めてみると、人の初心を宿している子どもたちの、人間としてある種完成された在りようが見えてきます。身近な人々を信頼しきつて、何だかいつも幸せそう。翻って私たち大人はどうでしょうか。山あり谷ありの人生の歩みの中で鈍ってしまったたぐさんの感性の中に、もう一度取り戻したものが見えてくるような気がします。

最後に写真家、星野道夫さんの言葉をご紹介いたします。

「大人になって、私たちは子供時代をとっても懐かしく思い出す。それはあの頃夢中になったさまざまな遊び、今は、もう消えてしまった原っぱ、幼なじみなのだろうか。きつとそれもあるかもしれない。が、おそらく一番懐かしいものは、あの頃無意識にもついていた時間の感覚ではないだろうか。過去も未来もないただその一瞬一瞬を生きていた、もう取り戻すことのできない時間への郷愁である。」

過去とか未来とかは、私たちが勝手に作り上げた幻想で、本当はそんな時間など存在しないのかもしれない。そして人間という生きものは、その幻想から悲しいくらい離れることができない。それはきつと、ある種の素晴らしさと、それと同じくらいつまらなさを内包しているのだろう。

まだ幼い子どもを見ている時、そしてあらゆる生きものたちを見ている時、どうしようもなく魅きつけられるのは、今この瞬間を生きているというその不思議さだ。きつと、私たちにとって、どちらの時間も必要なのだ。さまざまな過去を悔い、さまざまな明日を思い悩みながら、あわただしい日常に追われてゆく時間もまた、否定することなく大切にしたい。けれども、大人になるにつれ、私たちはもうひとつの時間をあまりにも遠い記憶の彼方へ追いやっていく。」

『長い旅の途上』星野道夫 著

世の中、一見すると不平等な事が多いと感じられますが、どんな瞬間も、その時間は皆平等に与えられています。

「今」というかけがえのない瞬間瞬間を、丁寧に重ねて参りましょう。



『生きる力・1-3号』送付

おなじみ真言宗智山派が発行する情報誌「生きる力」をお届けいたします。

今回から新しい企画がいくつか始まっています。その中で12ページに『智積院の修行生活』（マンガ）という連載がスタートしました。私、副住職も、かつてこの修行道場で僧侶としてのスタートをきりました。折りに触れてお檀家さんから、どのような修行をしてきたのかとお尋ねをいただくことがあります。今後この連載に答えの一端が描かれるかと思えます。どんな表現になるのか私自身、興味津々です。ぜひご注目ください。

また以前よりお伝えしておりますように、本年は弘法大師空海さんがお生まれになつて1250年という節目の年です。総本山でも様々な法要や行事が行われております。海禅寺住職も幾度となくそれらに出仕させていただいておりますが、本号の6ページにたまたま住職が写っております。どうぞご覧いただき、記事もご一読ください。

施餓鬼会のご案内

恒例の施餓鬼会法要、今年からコロナ禍以前の形態にできるだけ戻して実施いたします。詳しくは同封の別紙、『施餓鬼会法要のご案内』を御一読ください。

日程：令和5年8月12日（土）
時間：十時〇〇分 諸報告
十時十分 法話（佐々木大樹先生）
十一時〇〇分 施餓鬼法要
十一時五十分 お塔婆授与（順次散会）

◎法要の前には久しぶりに講師さん（布教師）をお招きしてご法話をいただきます。真言宗の宗祖、弘法大師空海さんは、仏教者である以前に、実は日本文化のあれこれに大きな影響を与えている偉人でもあります。今回はそのような側面からわかりやすく楽しい内容でお話しいたできます。どうぞご期待ください。

講師：佐々木 大樹 師

（ささき だいじゅ）

大正大学仏教学部准教授・学長補佐

川崎大師教学研究所教授

智山伝法院非常勤講師

※副住職大学時代の先輩でもあります

※海禅寺墓地にて塔婆立てが、古いお塔婆でいっぱいになっております場合は、それぞれの墓地脇に塔婆を寝かせ、積み置いてください。境内外墓ご利用のお檀家さんの古いお塔婆も、寺にご持参いただければお焚き上げし、読経供養いたします。
（なるべくお盆中にお持ちいただければ幸いです）



市役所リニューアルに

上田獅子演舞

去る令和5年5月20日、上田市役所リニューアルオープンに伴う記念セレモニーにおいて、獅子舞の演舞をさせていただきました。

上田獅子は天正11年（1583年）に真田昌幸が上田城築城の際、その地固めのために招聘され舞われました。

その際、上田獅子は田植えを表現するとされる「常田獅子」と、稲刈りを表現する「房山獅子」とでそのお役目を勤めたそうです。一説には物事の「始め」と「終わり」も表現しているとのこと。その後、祇園祭、近年では真田まつりで舞われ、伝統的な獅子舞を今に繋いできています。ただ、常田地域と房山地域と両地域の大勢の関係者が担うが為に、上田市の予算の関係で（と聞いています）、公の祭事に出演するのは両獅子舞が隔年交代で、交互に演舞してきました。

今日までどこかで互いにライブル視していたところがありました（私だけかもしれないませんが）、共に一つの目的のために演舞することで何かが通い合う、あたたかな嬉しい時間となりました。日々色々なことがありますが、日常の平和の入り口はこうしたことだから開かれるのかもしれないと静かに感動しました。そして獅子がこうして華々しく舞える裏には、たくさんの方々の関係者各位のお支えがあつてのことです。有り難いことです。忘れぬ感謝の一日となりました。上田市が誰にとつても住み良い街となりますように。人と人との調和が保たれますように。

物知り小話

「囀にのる」という言葉があります。一般的には「調子にのる」「つけあがる」「思いががる」という意味で、誰かを揶揄するときに使われます。

「囀」には、物事の状態や勢力という意味があります。もともと「囀」とは仏教の法要で、僧侶が節をつけて歌のようにお経を唱える声明（しようみょう）において転調することを意味して使いました。この転調は難しかったため、調子をうまく変え、コントロールしながらお経を唱えることを「囀にのる」と言いました。そこから調子にのることを言うようになり、「つけあがる」の意味に転じ、変化していききました。私たち真言宗智山派のお経は、他宗に比べてより高音でメロディアスなお経が多いと言われております。今年のお盆も心中は囀にのらず、読経は囀にのって、各お檀家さんのご先祖を、しっかりと丁寧にご供養申し上げる所存です。



左側が「常田獅子」、右側が「房山獅子」。衣装のデザインが少しづつ違う点も興味深いです。